

## 最後の手紙

さる十一月十四、十五の両日、私の勤務する比治山女子短大で、中古文学会秋季大会が開かれることになり、その事務局のある学習院大学の松尾聡教授が、準備のため一日前の十三日夕刻広島に着いた。松尾氏は四十年来の友で、この旧友を広島に迎えることを、私は満足とした。

二人が駅ビルの飯屋で、久しぶりに対坐したとき、その前日東武デパートで開会されたばかりの三島由紀夫展の話をはじめて聞いた。その席で、三島由紀夫研究家の越次俱子さんからことづかったという目録も受け取った。頁をめくってゆくと、懐しい写真がつぎつぎと現われてくる。

最後の手紙

私のつけたマークのある、中等科三年時代の作文もある。成績簿もある。改めてゆっくり見ることにして、私は頁を閉じて、盛況だったという展覧会の話の方に耳を傾けた。そのうちに、松尾氏が鞆を開いて、一枚のはがきを取り出し、三島君に寄せ書きを出そうという。まづ自分が書き、後半分に私に書けという。私は、その前日寄贈を受けたばかりの『作家論』への謝辞を述べ、そ

れから、『新潮』連載中の「天人五衰」について、大河が海に注ぐ前、河口にさしかかろうとするあたりの水勢の凄じさを思わせるものがある、という意味の感想を記した。最後に、来春は上京する心組みなので、そのとき逢うのを楽しみにしている旨を書き添えた。宛名は松尾氏が書き、所番地は持ち帰って私が書いた。学会のことに忙殺されて、投函したのは翌々日だったように記憶する。

寄せ書きに対する返事の封書が届いたのは、二十日だったか、ひよっとすると二十一日だったかも知れない。大森局の十一月十八日十八〜二十四時の消印があるところからすると、二十一日の公算が大きい。中身の日付は「十一月十七日」とあるから、恐らく寄せ書きが届いた日の夜にでも認められたものと思われる。

手紙は横長の便箋四枚に書かれていた。一枚目の終りの方に、つぎのような一節がある。

「豊饒の海」は終りつつありますが、「これが終つたら……」といふ言葉を、家族にも出版社にも、禁句にさせてゐます。小生にとつては、これが終ることが世界の終りに他ならないからです。

これは進行中の作品にふれた私の感想への返事のもりらしいが、何か容易ならぬものを、そこに感得した。そういえば、東武デパートから展覧会の企画が持ち込まれたとき、「私の文学生

活も四半世紀に垂んとして、こころで整理の仕時しどきだと思つてゐた」と、目録の巻頭に述べていることも気になるが、「矛盾に充ちた私の四十五年を、四つの流れに区分し、この『書物』『舞台』『肉体』『行動』の四つの河が、『豊饒』の海へ流れ入るやうに構成した」とあるのも、手紙のさきの文面と符合するものがある。それから、「書物の河」「舞台の河」「肉体の河」「行動の河」それぞれの見出しの文章の内容も、一つの思ひに収斂されるような気がする。私は、手紙の末尾の、「春まで御上京にならぬ由、洵に残念に存じます。お話ししたいことが山ほどある昨今であります」まで読んできて、何か不安になり、春を待たず、学校が休みになったら、さっそく上京しようと思つていたところだった。

二十五日、やつと寝台列車「音戸2号」の上段の切符が手に入り、新幹線に乗りついで上京することにした。寝台に横たわつて、眠りもやらずいると、平岡公威少年の目を大きく見ひらいた正服姿が、しきりにまなかに立ち現われるのであつた。八月十二日夜記▽

(四六・一)